

八学大生と障がい者施設 プロジェクト

中心街 作品で明るく

ハ 戸

八戸学院大学人間健康学科の大木えりか講師のゼミが、三八地域の障がい者施設と連携して八戸市中心街に作品を展示するプロジェクトに取り組んでいる。4月に老舗百貨店「三春屋」が閉店するなど、閉塞感が漂う市中心街を障がいがある人たちの個性を生かした作品で彩り、活気を取り戻す狙い。10日の八戸まちなか広場マチニワ、17日の八戸ポータルミュージアムはっちでの展示に向けて、着々と準備が進んでいる。

（相澤賢斉）



画用紙とのりを使って貼り絵を制作するどんぐりの家の子どもたち—11月23日、三戸町

プロジェクトを発案したのは、同ゼミの佐々木綾奈さん（3年）。社会福祉を学ぶ佐々木さんは、障がいがある人の作品を見る機会があり、豊かな想像力と個性に感銘を受け、かねて「障がいのある人と協力して何かできないか」と考えていた。そんな中、活気が失われつつある市中心街を見て、プロジェクトを思いついたという。

プロジェクトは市の助成金を受け7月から始動。ゼミ生4人が分担して7施設を訪れ、協力を依頼した。森大喜さん（同）は「断られることもあったが、施設側の意向を踏まえてプロジェクトの内容を変更するなど、自分の考え

あす マチニワ 17日はっち

を押しつけず信頼関係を築けるように意識した」と話す。8月に協力を得られた施設でワークショップを開いて作品の題材や日程を決め、同月下旬から順次制作を始めた。

作品は地元の伝統工芸品や名産品をモチーフにしたオブジェと、人気絵本のキャラクターを題材にした貼り絵など約40点。同市の障害者サポートセンター「くるみの里」と生活介護事業所「サクラ」、三戸町のNPO法人「どんぐりの家」で役割を分担して作業した。

プロジェクトに取り組む八戸学院大学の大大木講師（後列中央）とゼミ生―八戸市のくるみの里



大木講師は、障がいがある人が置かれている現状について「本人たちの意思が反映されないまま、仕事や施設の活動に従事している」「家と施設以外に活動の場が少ない」と指摘。「作品が多くの人の目に触れることで、障がいがある人自身が地域に貢献できている、地域の一員である」と認識することが大切。これがかつかけとなって活躍の場が広がり、障がいがある人の意思や個性の理解促進につながる」とプロジェクトの意義を語る。

森さんは「協力してくれた方々が元気に楽しく作業してくれたり、声をかけてくれたり、自分たちも助けられた。達成感が感じられる作品となったので、見に来てびっくりしてほしい」と話している。